

書店員の本の魅せ方・選び方

伊藤清彦 氏（一関市立大東図書館長）講演概要

生まれ育った町には本屋も図書館もなく、本屋という職業があることに気が付いたのが 15 歳のときです。それからの高校・大学時代は本ばかり読んでいました。28 歳で東京の山下書店の書店員となって、町田店の店長もやりました。それから 1991 年に盛岡に戻ってきまして、盛岡のさわや書店で働くことになりました。その翌年から 17 年間、店長を務めました。さわや書店は、わたしが入った当時は、まったく無名の本屋だったのですが、やがて全国から注目されるようになりました。私がさわや書店で何をやってきたか、どんな風の本と付き合ってきたかをお話したいと思います。

*紹介書籍：伊藤清彦著「盛岡さわや書店奮戦記」2011 年 2 月発売。発売 1ヶ月後に震災が起こった。

本屋と図書館の大きな違いは、「売る」か「貸す」か

本屋はあがりが少ない業種です。一番上がりが少ないのは酒、2 番目が本です。共通点は、どちらも重くて、腰を悪くする仕事だということです。酒とは違う本の利点は、上がりは少ないけれど、固定であるということです。どこの本屋でも同じ値段で本を売ります。ダンピングしなくていいですし、たくさん売れば利益も大きくなります。薄利多売の商売なわけですね。本屋で働いて驚いたのは給料が低いことでした。そこで給料を上げるには、商品である本をたくさん売ればいいんだということで、どうすれば本が売れるのかをいろいろ考えてきました。

徹底して本を読む

書店員というのは、読んでない本、内容を知らない本は売ることにはできないと考えています。さわや書店に入ったとき、スタッフが本を読まないことに驚きました。そこで、本の面白さを伝えられるようなスタッフになるように教育していきました。すると、スタッフの間で、読んだ本の書評誌を作るようになりました。その書評誌の中から、お客さんに薦める本については、ポップの形にして店頭に出していくようになっていった訳です。そうやってスタッフが変わって、書店が変わるのに 10 年はかかりました。

客層を分析する

狭い店でも売り上げを伸ばすために、どういう時間にどんな人が来て、どういう本を買っていくのか、3ヶ月くらいかけて傾向を調べました。午前中は年配のお客さんが多くて、健康雑誌やテレビ番組関連の本が売れる、という風に、時間帯による客層の違いや、売れる本のジャンルを掴んで、1日5回くらい本を並べ替えました。そうすることで、坪効率を上げることができるからです。分析といえば、新刊の売り上げについて予想することもやっていました。この本は、他の書店だとこれくらい売れるだろう、自分の店だとこれくらいだろうということを予想します。15年から20年くらい続けていくと予想が当たり始めて、それとともに注目されるような作家がわかってきました。

本の魅せ方・選び方

書店で本の売り上げを伸ばすには、棚・面・平を組み合わせる本を置くことが大事だと思っています。キーとなる本を見つけて、それを中心に、これを読むならこれも読むだろうという感じで、つながりを持たせて本を並べていきます。キーとなる本の周辺にどんな本を並べて肉付けするかで、それぞれの書店の個性が出てくると思っています。

それから、書籍だけで売らず、雑誌、コミックス、DVD、CDなどを組み合わせ、一つのジャンルを作ったり、フェアをしました。特に好評だったフェアは、宝塚、格闘技のフェアです。宝塚関連のものは、書籍、雑誌、スターの写真集、DVDなど様々なものがあります。出版元が神戸や大阪などのものも集めて、盛岡で宝塚のものが手に入る、さわや書店にいけばある、というくらい揃えました。すると、口コミで遠方からもお客さんが来るようになりました。格闘技のフェアのときは、私がそれほど格闘技に詳しくなくても、お客さんが教えてくれたことを棚に反映させることで、充実した内容になりました。

書籍との組み合わせにおいて、コミックス*はとても重要だと思っています。コミックスは、いまや書店や出版社の経営を支えているものなのですが、書店では新人女性スタッフが担当することが多くて、男性向けのものなどが排除されやすく、映画化やドラマ化された当たり障りのないものが売り場の一番いい所を占拠するようになっている気がします。コミックスをコミックスの棚に置いていただけでは、面白いものが埋もれてしまうので、私は、年配者向けのコミックスは文芸書と組み合わせたりもしました。コミックスの絵と言葉で紡ぎ出す世界を大事にしたいと思っています。

*紹介書籍： 内海隆一郎、谷口ジロー著「櫂の木」(漫画) / 穂積著「式の前日」(漫画)

新刊を読んでいると、それより面白い2~3年前の本があったなと思うことがあります。また、受賞作ではないけど、これはお薦めしたいという本が出てくるのですが、既刊の本や一般に注目度の低い本というのは帯がついてないことが多いです。そこで、お客さんの目を引き、内容が伝わるように、ポップを付けることを始めました。長々と書いても読まれないので、何度も書き直して、ワンフレーズに集約していきます。これでよし、と落ち着くまでに10回、20回くらい変えます。そうやって売り上げを伸ばした本が「Dr.ヘリオットのおかしな体験」*です。本を置く場所やどんな本と組み合わせるかも、様々試してみて、一番動きのいいところでやっと落ち着かせる、という感じでやってきました。

*紹介書籍： ジェイムズ・ヘリオット著；池澤夏樹訳「Dr.ヘリオットのおかしな体験」…ポップを書いて一番売れた。5年以上かかって5ケタセールス。

図書館での仕事

館長の仕事は書類のハンコ押しと選書です。今、8割くらいの図書は私が選書しています。それから残りの時間は何をしているのかというと、書店で働いていたころと同じように、棚を回って本を触るようにしています。本に触っていると、その棚に何がないか、ジャンルで欠けている本に気がきます。書名のリストを見ただけ、頭の中だけではわからないものだと思います。そうやって、図書館の棚を蘇らせていったところ、貸出冊数や利用者数も増えてきたように思います。

出版不況のせいで本が重版されなくなり、図書館には欠陥のある初版本が増えていきます。本は重版されるとき、読者の指摘などを反映して訂正されるものなのですが、今はそれがありません。そういうことからい

いますと、文芸書ですと文庫化されたものの方がより内容は完成されたものになっています。百田尚樹の「永遠の 0(ゼロ)」*の場合は、文庫化されたときに 600 カ所も訂正されていました。また、作家自身によって、文庫化のときに内容を変えることもあるので注意した方がいいですね。

*紹介書籍： 百田尚樹著「永遠の 0(ゼロ)」…さわや書店で 2007 年の年間 1 位になったことがきっかけで講談社で文庫化(単行本は太田出版)。修正箇所数は伊藤氏が付箋を貼りながら数えたとのこと。

書店のように、売れなかったら返品するわけにいきませんから、図書館では 1 冊 1 冊的確に選んでいかなくてはと思っています。税金を使っていますし、ダメだったらやめればいい、とはならないわけです。だから図書館で働く人も、勉強しないといけないと思います。司書さんは、図書館の運営については良くわかっていても、本はあまり読んでいないように見えます。それから、知らないことは専門家に聞く、という姿勢も大切です。東北では南相馬市立中央図書館が素晴らしいと思いますね。

図書館は予算に縛られて仕事をしなくてはいけなくて、おかしいと思ってもなかなか変えられないのが悩みどころです。また、改善するには時間がかかるのに、職員の異動があるので図書館に一貫性を保てないのが残念です。

図書館の本の並べ方は分類法による訳ですが、予想通りのところに本があるので面白くないなと思っています。ノンフィクションの作品を作家毎にまとめて並べたいと思っても、作品内容によってバラバラの棚に並んでしまっている訳です。もちろん、分類がないと初心者の職員なんかが返却するとき困るというのはわかります。でも、考えなくてもできるシステムチックな棚を作ることが、大型書店でもやっているつまらない本の並べ方につながっているような気がします。

図書館でも色々なフェアをやりましたが、書店とはやり方を変えています。図書館では、テーマを緩く設定して、10 冊でフェアをする時は、借りられた本のスペースを補充するために 30 冊の控えを作っておくようにしています。本屋であれば、売れる本は複数冊仕入れますし、追加で発注することもできますが、図書館は基本的に 1 冊しかないの、こういうやり方になりました。失敗したらすぐ撤退します。選挙のフェアは 1 冊も借りられなかったの、すぐやめました。今一番受けがいいのは「心のあたたまる本」というフェアです。

本から生まれる人付き合い

書店にいた頃も、図書館にいる今も、本棚のところにいます。すると、本の話をしたい人が来てくれます。そんなとき、僕は周りにいる他の人たちにも聞こえるくらいの声の大きさを話をするようにしています。そうすることで、聞いている人たちが「店長(館長)と本の話をしていいんだ」と思って、次々に話しかけてくれます。そうやって、本が好きな人たちが集まってくる場所になっていく訳です。東京の書店にいた頃出会ったお客さんと、今でも交流があることはうれしいことです。本を売る、貸すというだけではなく、もう一歩踏み込んでお客さんや利用者と触れ合うことに楽しみを感じながら、この仕事をしてきました。

*紹介書籍： 高橋克彦著「火怨」…伊藤氏のここ 20 年間のベスト 1 / 松家仁之著「火山のふもとで」…伊藤氏の 2011 年のベスト 1。文体が面白い。

***質問「東日本大震災関連のコーナーに並べたい本は？」

回答： 宮澤賢治の作品。村上昭夫、吉野弘などの詩集。